



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

占領期沖縄における八重山琉米文化会館と図書館の自由

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田,稔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107253

占領期沖縄における八重山琉米文化会館と図書館の自由

前 田 稔*

生涯教育

(2009年9月28日受理)

1. はじめに¹⁾

日本の図書館界を方向付けた GHQ 占領期よりも、遥かに長い27年間もの米国民政府 (USCAR) 占領を経験した沖縄では、民主主義や自由と図書館の関係をいっそう鮮明に提起するだろう、というのが本稿の提起する問題である。「図書館の自由」が想定する民主主義社会、すなわち、自分のことを自分で決められる社会では、自由意思による決定を担保するために、あらゆる資料に接触可能な場の保障が不可欠である。返還前の沖縄では「活発」かつ「自由」な図書館活動が存在したのだろうと考えた。

このような仮説の契機となったのは、沖縄本島北部の今帰仁 (なきじん) の公民館への訪問である²⁾。真紅で彩られた今帰仁の公民館は、沖縄らしさを実感するのに十分であった。案内された公民館図書室³⁾には、子供向けを中心に多くの本があった。十進分類され、すべての本にラベルが貼ってあり、きれいに整理されている。しかし、更新がなされておらず、沖縄返還を境に、時間が凍りついている気がした。今帰仁公民館のかたの説明によると、詳しいことは不明だが、昔は活発に使用されたが、やがて本が更新されなくなり、人の手も加わらなくなっていったということであった。不思議に思い、今帰仁の南に位置する具志堅公民館にも立ち寄ったところ、図書室は存在するものの、やはり、物置同然で、中にある図書は埃をかぶっていた。もちろん、すべての公民館図書室がそうではなく、単なる集会所の片隅に本棚があるにすぎない場合も含め、多様な形態が存在した。沖縄県立図書館で聞いた話⁴⁾によると、現在でも公民館図書室の支援を

行っているとのことであった。一方、他の機会に訪問した那覇、宮古島⁵⁾、石垣島の図書館では、県立図書館と市立図書館が互いに近くに存在し、しかも、双方ともに市民への直接のサービスを重視している点に、強い違和感を覚えた。1対多のネットワークならともかく、石垣島では沖縄県立図書館八重山分館と石垣市立図書館を合わせても2館しか存在しない。

沖縄全体を研究対象とするには対象が広くかつ深すぎたため、特に現地出身の知人の協力が得られた八重山地方に的を絞ることにした。石垣島を中心とする八重山地方の調査を進めてゆく過程⁶⁾で、大正3年に開館した八重山通俗図書館を起源に、地域で維持発展してきた琉球政府系列の図書館と、米国民政府が政策的に配置した図書館の2系列が存在しており、前者が県立図書館、後者が市立図書館の前身であることがわかってきた。後者に位置づけられる米国民政府が設立した八重山琉米文化会館は、周辺の島々も含めた巡回活動をはじめ、精力的に行事や図書館活動を行っており、返還前の沖縄では「活発」な図書館活動が存在していたという仮説は裏付けられた。

しかし、「自由」な図書館活動が存在していたという仮説については、琉米文化会館が米国の政策や情報を住民に周知させることを目的とする米国民政府渉外報道局直轄の施設であったことからすると、即断しきれない。たとえば、文化会館の目標として、共産党特有の破壊、侵略、残忍性などを周知せしめることや、米国の国策、米国の琉球政府への協力を示す活動、その役割りなど周知せしめることが含まれていた。住民が創り上げてきた図書館と与えられた図書館の2つが、同じ地域で並立していたのである。

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

一方、沖縄返還にともない、琉米文化会館は廃止の危機にさらされ、解雇を宣告された職員たちは、存続を訴えることになった。とはいえ、日本という国について正しく理解及び認識させる再教育の場として職員たちが提案したことは興味深い。市立の機関として生き残った後、市民の図書館に変化してゆき、沖縄県立図書館八重山分館と重複する役割が増加した。沖縄県立図書館八重山分館廃止の是非に関する議論が現在巻き起こっている。

筆者は全般的な社会背景を探るために、これまで沖縄各地での調査活動のほか、「伝承・習い事研究会」において沖縄における社会教育について議論を重ねてきた⁷⁾。それは、沖縄社会の特性と背負ってきた悩みをグローバルな視点で比較・解明することで、教育や学びの本質に少しでも近づけることが期待できたからである。たとえば、学校に対するアンケート調査では、エイサー等の沖縄の伝統文化継承活動が、他の地域よりも際だって活発であることが明らかになり、それは決して偶発的なものではなく、琉球王朝から脈々と続くアイデンティティ形成への葛藤が、地域と学校の関係に反射的に投影されていることが見えてきた。沖縄を研究対象にすることで、極めて興味深い事実を数多く知ることができ、社会科学に携わる研究者が一度は必ず沖縄に興味を抱くとまでいわれるほど豊富な研究材料の存在を実感した。しかし、研究の進展にともない、極めて重苦しく深刻な実情が垣間見えてくるなかで、対象の裾野の広さと、奥深さに戸惑いを覚えることになる。「ゆいまーる」や「いちゃればちょうでえ(行き逢えば兄弟)」という言葉はユートピア的に美しいが、一方で、様々な矛盾を解決する知恵として長年にわたり形成されてきた側面も否めない。相互扶助の規範を必要とする背景には、古くから周辺諸国に挟まれながら、常に主体性を内面的に問い続ける文化形成基盤が存在する。とはいえ、それは地域の特性に基づくものと断定するのではなく、むしろ沖縄を通じて、人間や社会とは何かについて問い続けることに意義が認められる。

先行研究では、琉米文化会館の全体像についての紹介や、蔵書の詳細な研究がなされてきた⁸⁾。実のところ、先駆者による精緻な業績を前にして、沖縄に関する歴史的な事実を正確に調査、叙述、評価することへの筆者の力量不足は否めない。また、本稿では、占領期沖縄の全体像との整合性、八重山琉米文化会館の固有性、他の琉米文化会館との比較の紹介を十分に行っていない⁹⁾。思想の自由と図書館の関係について探るという本稿の目的に少しでも近づくために、本稿では、

各種の記録や先行研究を参照しつつ、図書館の自由についてのヒントを探しつつ論を進めてゆきたい。

2. 八重山琉米文化会館の歴史

沖縄に5カ所存在した琉米文化会館について、『沖縄大百科事典』¹⁰⁾では次のように説明されている。

「米国民政府渉外報道局が直轄する文化機関。Ryukyuan-American Cultural Center。米国の政策や情報を住民に周知させることを目的に、1951年(昭和26)から52年ごろまでに、全琉を5ブロックに分け、名護・石川・那覇・宮古(平良市)・八重山(石垣市)の5カ所に設立した。アメリカ式の情報・文化センターで、各館には約1万冊の100%開架式図書室、200～300人収容のホール、クラスルーム、視聴覚ライブラリー、移動図書館車などを完備し、開館時間も午前9時から午後10時までとし、アメリカの進んだ理念の図書館サービスと行き届いた社会教育活動を実施し、利用者も多かった。高等弁務官機関誌『守礼の光』、米国民政府機関紙『今日の琉球』の米軍広報誌も同館から無料配布された。1968年度(昭和43)の利用者は236万人。復帰(1972)後は、日本政府に買い上げられて各所在自治体に無償で譲渡された」。

1963年の『守礼の光』における琉米文化会館の説明では、より具体的に紹介されている¹¹⁾(ふりがなは原文通り引用した)。

「各文化会館とも、老幼男女や、素養のいかんにかかわらずなく、いろいろな人たちに文化に接する機会をあたえています。また巡(じゅん)回班(はん)を不便な地区に送って奉(ほう)仕しています。昨年は、トラックの巡回が合計で11万キロに達しました。これは世界を2周半以上したことになります。文化会館は、琉米両国人の間の理解と友好(こう)の増進に努めています。それはおたがいの伝統的文化を尊重しながら文化の交流を図るという基本的方針(しん)によるものです。この方針に基づき、大衆の要望に答えるとともに、新しい生活様式や最新知識を、琉球のすみずみまで広めるためのいろいろな計画を立てて実行しています」。

「知識はわれわれに理解と自信をあたえ、生活

をよくする合理的方法を教えます。各文化会館の図書室には、実際に役に立つ技術関係の図書がたくさんあります。参考図書を自分でたくさん買うことはお金もかかるし、容易ではありません。特に専門書の場合そうです。参考書には各方面のも

のがあり、申しこめばだれでも読むことができます。また、旅行、芸術、音楽関係や、娯（ご）楽図書も多数備えています。文化会館の図書室の特徴（ちょう）は、有名なアメリカ作家の著書の日本語訳をたくさん備えていることです。みなさん



上：ファッションショウ「文化会館主催のファッションショウは八重山女性服装史に一エポックを画したこれによって女性の洋装の知識と洋装への転換がとみに高まった。」

下：狂言大会「キョングン（狂言）“いもと米”を演ずる八重山きっての喜劇陣」

写真1 与儀玄一氏提供の写真集より：ファッションショウと狂言大会（「」内は原文のまま）



左上：方言島めぐり大会「なくなりつつある方言を大事にしようとの試みで各地（八重山諸島内）の方言を披露してもらった。標準語も大切だが方言を保存することも忘れてはならない」
右上：「地元団体並個人などの文館への協力」
左中・左下：八重山琉米文化会館図書室
右下：文化会館の館外活動車「週三回を定期として島内各部落を疾駆。裏石垣ではわざわざ止めてご苦労さんとパイ
ン、トマト、野菜などをほりこむ人もいた」

写真2 与儀玄一氏提供の写真集より：方言島めぐり大会と図書室・館外活動車

はここで、ヘミングウェー、フォークナー、スタインベックなど著名なアメリカ人作家の本を読むことができます。各文化会館には、合計1万冊（さつ）の日本語の本と約2千冊の英語の本があるほか、多くの資料をそろえております。たとえば約110種の日本語と英語の雑誌（し）があり、その大部分は月刊誌で、あらゆる年齢層（そう）の読者のこのみに合うものを集めています」。

「なお、文化会館にない英語の本を読みたい人のため、高等弁務官府と沖縄の陸軍スペシャル・サービス図書館では図書交流計画というものをはじめました。米軍の図書館から本を借りたい人は、

もよりの文化会館の図書室に申しこめば借りられます。各文化会館の巡回班は、不便な地方に住む人々のために一日平均5つの村を回って、各村の公民館の図書室に本を置いてきます。最後に本をおろした所で、スクエア・ダンス、レコード演奏（そう）会、子供会、映（えい）画などいろいろなもよおしをします。また現地の要望に応じて図書館学と英語の特別教室を開きます」。「文化会館では、図書館運営の近代化に役だつことをねらいに、率先して書だな開放式を採用しました」。「各文化会館の図書室は、琉球のみなさんにいっそうよく奉仕するため、読書クラブをつくったり各年

年齢層の討論会を開いたりしています。もしみなさんの中に、まだ文化会館の図書室を利用していない人があったら、さっそくもよりの文化会館に行ってください。みなさんは、ただ申しこむだけで、思いのまま新しい知識を吸（きゅう）収して教養を高めることができます」。

5カ所の琉米文化会館のなかでも、とくに八重山琉米文化会館に着目してみよう。『文館案内』¹²⁾によると、「琉球とアメリカの文化交流の場、また理解と親善を深める場として1952年4月米国民政府によって建てられ」た施設である。「図書館活動とプログラム活動を主に八重山住民へのサービス機関」で、「そのほか地域のあらゆる文化的行事にはできるだけ協力し、また文化団体の会合など会場を無料で提供」していた。

1953年の時点で、八重山琉米文化会館の職員は13人であり、建物は赤瓦葺きの木造建物で、閲覧室（開架書架）、講堂、音楽室（兼会議室）、応接室、事務室からなり、1962年には、鉄筋コンクリート2階建742平米の建物に改築された。事務室、2つの教室、舞台付ホール、図書室、ロビー（展示場）、司書室で構成されていた。他の琉米文化会館との比較については表1を参照してほしい。1972年の日本復帰にあたり、復帰特別措置法により、石垣市に譲渡され、八重山琉米文化会館は、石垣市立文化会館となった。石垣市立文化会館の図書館機能である、石垣市立文化会館図書室は、その後1990年に石垣市立図書館として独立し、新しい建物とともに現在の臨海部に移転した。

図書室については、『文館案内』につぎのように紹介されている。「文館図書室は近代図書室としての機能を備え自由接架をよるこばれています。誰れでも、気軽るに、本の選択ができることは大きな魅力でまた

保存、収集、記録された特別資料を利用することができ、レファレンスサービスに力を入れている図書課係はあなたの勉強のための御相談にこころよく応じます。図書室はあなたの生活になくってはならない社会機関です」。

図書資料としては、「和書、洋書、各種辞典事典類14,000冊の蔵書と、琉球内各種新聞、週刊、旬刊、月刊の雑誌75種、洋雑誌40種、ヴァイテカルフファイル、バックナンバー、視聴覚教育資料、郷土資料、琉球新報縮刷版」を備えていた。映写幻灯機、マイク、テーブル、灰皿、レコード、テープレコーダー、プレイヤーの館内貸出を行っており、フィルムと紙芝居に関しては館外貸し出しも行っていた。バックナンバーとして、「図書館雑誌、学校図書館、視聴覚資料、学校英語研究、時事英語、英語研究、CQ ハム、ラジオ、科学朝日、切手趣味、アサヒカメラ、アトリエ、いけばな、演劇界、カラーデザイン、音楽の友、政府刊行物など」を備えていた。また、「ヴァイテカルフファイル」を用意し、「立体式整理法のことで多種多様なインフォメーションに役立つパンフレットや新聞雑誌を切り抜いて、すぐ利用できるように排列、整理した資料」を提供していた。提供されていたサービスは、「館内閲覧、貸出業務、図書館案内、読書指導、読書クラブの育成費、資料展示会、座談会、講演会、講習会などの外、図書棚つきの館外活動車で僻遠地を訪問」することであった。あわせて、「レファレンスサービス」として、「『インフォメーション』を求める読者および研究調査のため図書館資料を利用しようとする読者にいろいろの面で援助」し、「電話でのお問い合わせも可能」であった。そのほかの活動として、図書室コンサートを行っており、「職場から解放された方々が、我が家へ帰りつくまでの小1時間、頭やすめ、骨やす

表1 各琉米文化会館の比較

名称	職員数	構造	広さ	竣工年	部屋
那覇琉米文化会館	16人	鉄筋コンクリート 二階建	1366㎡	1969年	事務所、教室（2）、ホール（舞台付）、図書室、ロビー（展示場）、司書室、フィルム室、映写室、作業室、舞台控室（2）
石川琉米文化会館	12人	鉄筋コンクリート 一階建	521㎡	1959年	事務所、教室、ホール（舞台付）、図書室、ロビー（展示場）、司書室
名護琉米文化会館	11人	鉄筋コンクリート 半二階建	1115㎡	1960年	事務所、教室（2）、ホール（舞台付）、図書室、ロビー（展示場）、司書室
宮古琉米文化会館	11人	鉄筋コンクリート 二階建	660㎡	1961年	事務所、教室（2）、ホール（舞台付）、図書室、ロビー（展示場）、司書室
八重山琉米文化会館	13人	鉄筋コンクリート 二階建	742㎡	1962年	事務室、教室（2）、舞台付ホール、図書室、ロビー（展示場）、司書室

めに読書を楽しみながら、クラシックやジャズに親しむ時間としてよろこばれて」いた。また、「月2回催している晩のコンサートへ参加出来ない方々に受けて」いた。

図書室の展示活動として、4つの活動を行っていた。1つめは、ロビーを飾るショーケースである。「東江大吉氏寄贈、琉球の骨董品（各種つば、花びん、酒びん、香炉、茶碗、嘉びん、その他）と有志各位寄贈のバナリ焼、石器類、化石など130点の骨董品資料大棚、八重山近海の魚介類紹介ケース、群島内生息の蝶類展示ケース、これらは高原元亮氏の寄贈で本館を訪ねる人々の足をくぎづけして」いる。2つめは、ロビー展で、「写真ニュース、週間展望、広報局発行のプレスリリース、国際ニュースの外に二階への階段わきを利用した展示板には世界の名画と作者紹介、琉米の産業、文化、教育、社会その他各面にわたる写真展や美術個展、グループなど展示活動が続いて」いた。3つ目は窓利用のショーケースで、「事務室南側の窓を利用したショーケースは全長6mの大型で、八重山の農業今と昔、有望な水産物の紹介、樹木展岩石展、気象関係展、琉球楽器の工程紹介、琉米の風俗習慣など道ゆく人の目を楽しませ、教養の場」として機能している。4つめは図書コーナーで、「あらゆる機会をとらえて効果的な展示活動の場として図書室コーナーを設け」、「強調される週間、文学界の展望、時の人、時の話題、その月生まれの偉人、楽人、文壇人の紹介、八重山、宮古、沖縄本島、日本、米国、その他の外国の情報をキャッチして紹介するコーナーも図書室を訪れる人々のよろこびで」あった。

広報活動として、「文館だより」を発行しており、また、「ヴォランティア講師」を歓迎していた。閉館日は、「新年、ワシントン誕生日、憲法記念日、子供の日、慰霊の日、独立記念日、お盆、労働祭、復員軍人の日、感謝祭、クリスマス」であった。

八重山琉米文化会館の所蔵資料について参考のために石垣市立図書館への移管および現在の状況を紹介する¹³⁾¹⁴⁾。石垣あかねにより児童書リストが作成されている¹⁵⁾ほか、石垣市立図書館長であった、内原節子によると、次の状況にある¹⁶⁾。

「米国主導の蔵書体系から復帰を機に日本の出版物が増え、かなりの廃棄はあったと思われるが、その間の統計資料は未調査なので数字では追えない状況である。しかし、新設の石垣市立図書館に文化会館図書室の蔵書が、7段7列の書架8面の冊数分移管されている。約1万5千冊ほどになる

だろうか。当時の職員がおらず原簿の確認もできない。石垣市立図書館はすべて新規に購入した図書でスタートしたので、文化会館から移管された蔵書は、登録もされず現在の蔵書数にも入っていない。」「他地域の琉米文化会館では復帰の時点はかなりこれらの本が廃棄されたようであるが、かろうじて八重山では残され、整理されないままの状態と保存されている。これらは現在の市立図書館で市民に提供される図書と同じレベルではなく、すでに『歴史資料』の範疇に入っている。占領下の沖縄を物語る資料としては第一級の資料なので、沖縄県全体の事業として調査研究が必要であると思われる。特に県内にある大学が中心となって、研究が進められることを期待している。すでに『琉米文化会館の資料』は一市町村立の図書館で所蔵するには、今日の図書館界の人事・世代交代・財政面などで困難な状況に入っている。早急な対策が必要である」。

なお、那覇市立図書館においても、小禄南図書館の閉架書庫に保管されている那覇琉米文化会館の13000冊の資料の扱いを巡って議論がなされている。たとえば、「資料構成（反共図書が多い）が偏っているとの見方もあるが、琉米文化会館がどういう本をもって活動していたかを知る手がかりにもなり、戦後資料として（那覇市の）歴史資料室にも資料として提供が可能である（一般貸し出しは難しいが、当時の出版物と現代版の比較研究材料となる。）」との点が那覇市図書館協議会で合意されている¹⁷⁾。八重山琉米文化会館の資料との関係では、「那覇で本を購入して5カ所に配分」していた¹⁸⁾。中央集中で分類も行い、それを分配していたため、「1館を調査すれば、5館は皆同じ」状況にある。

3. 琉米文化会館の存在意義

琉米文化会館の精力的かつ多彩な活動には、次のように高く評価されている側面がある。

「現在でも高く評価されている活動は、移動図書館活動と地域社会との交流という点に関する事業である。都市部の住民に図書や行事を提供するだけでなく、農村や離島の人々に対してもモバイル・ユニットを展開した。それには映写機、伝道発電機、レコード、テープレコーダー、紙芝居、展示用写真、貸し出し用図書が装備されていた。

那覇で約40箇所の地域を回り、61年の実績では走行距離は8691マイルであった。また僻地住民だけではなく、ハンセン病療養所や刑務所まで月一度のペースで巡回して映写会をもち、展示資料や読書資料を提供していたことは、占領上の便宜だけではなくに思われる」¹⁹⁾。

『『占領政策』に島ぐるみで抵抗してきた苦難の歴史も事実であるが、沖縄の人々が琉米文化会館を受け入れ、その恩恵に浴していたこともまた事実なのである。主たる目的が統治のための教育・文化政策であったといえ、琉米文化会館のまいた種がどこかで実りをつけている可能性も否定できない」²⁰⁾。

「私も小さい頃、小学校の運動場で時々催される屋外映写会を家族揃って観にいったのを覚えている。既製のスクリーンと映写機を持ち込んでの映写会ではあったが、当時は娯楽が少ない所為と部落放送での住民への周知徹底されていたこともあり、大勢の住民が集まっていた。そして、スクリーンに映し出される米国式の機械化された農業や工事現場の作業の様子に大人も子どもも興奮していた」²¹⁾。

漢那憲治と山田勉の研究²²⁾によれば、「琉米文化会館の中でもう一つ特筆すべきは、教育長事務所と連絡を取りながら、公民館活動の育成、発展に寄与したことである。巡回文庫、移動文化会館を行う事により、公民館活動を助成すると共に、公民館職員との懇談会、図書の整理法等の講習会をおこない公民館の育成に貢献している」。そして、1958年から1962年にかけて沖縄図書館協会を発足させ文化会館を中心に図書館活動を行っていた。この点、沖縄図書館史研究会²³⁾は、「琉米文化会館は『社会教育の統合機関』とか『都市型公民館』あるいは『多目的型大型公民館』とか言われているが、その機能はやはり図書館活動であり、しかも近代的な図書館サービスを提供していた」と評価している。

八重山琉米文化会館については、三木健は次のように紹介している²⁴⁾。

「八重山高校に入ってから、方角が同じだったので、よく遊びに行ったものだ。『遊びに行った』というのは妙な言い方だが、特に本を借りたとか、勉強するとかということではなかったからだ。それでも私の足を誘ったのは、そこにあるグラフィック雑誌や写真を通して、アメリカという異文化

に触れるたのしみがあったからだ」。「そこには沖縄の現実社会とはおおよそかけ離れた文明社会があった。また、想像を絶するような大自然があった。それらを眺めることで、自ずと異文化体験を味わっていたのである。1950年代は、俗にアメリカの黄金の50年代といわれるだけに、そこには豊かな文明社会があった。それに比べると、わが沖縄はなんとみじめなことか……と逆に思ったりしたものだ」。

また、豊川善一の描写²⁵⁾では、「当時、島の人々は文館＝ブンカンと呼んで、大人も子どもも気軽に利用し、何の抵抗もなく親しんでいた。人口2万5千から3万そこそこの小さな町は、道に人影もなくひっそりとして、映画館のほかに行く所が無かった」。「館内に入ると、そこは貧しくて惨めだった沖縄の現実からは、およそ想像もつかない。国も自然も街も人も動物も夢のように豊かなアメリカだった」。「中学、高校生が試験勉強によく利用したほか、若い男女や学生はフォークダンス、ジャズ音楽など憧れのアメリカ文化に触れた」。

以上からまず、第一にいえるのは、八重山琉米文化会館が八重山地域の文化形成に全く影響を与えなかったとまではいえないだろうという点である。八重山の民謡や伝承活動と、欧米文化の融合をみてとることができる。たとえば、ファッションショーが行われ、盆踊り大会もあった。写真に残された人々の表情は明るく、楽しそうである(写真1および写真2)。本土や沖縄本島からさえも隔絶され、娯楽が少ないなかで、文館の提供した様々なプログラムは、極めて魅力的であったに違いない²⁶⁾。また、沖縄本島と比べ、あくまで相対的にはあるものの、反米感情が弱かったという点も、各種プログラムを素直に受け入れる土台となっていたようである。占領政策と抵触しない範囲では、極めて幸せだった²⁷⁾。

筆者のインタビュー²⁸⁾によれば、八重山琉米文化会館は多くの人々がアクセス可能な市街地の中心に存在していたとはいえ、日常的に利用していたのは、そこまで徒歩や自転車で行ける範囲内の人々に限られており、石垣島全体から通える距離ではないということであった。一方、八重山文化の拠点として館外でも積極的な活動を行っていた。たとえば、必ずしも活動実態を表しているものではないとはいえ『文館案内』によれば、「それは館外で万におよぶ人を動員することもあり、館内で500名内外の場合もある。いずれも地域の人々の関心と呼び、感動を与え、慰安とよろこび

をつくりあげつつ今日に及んでいる」とされている。また、巡回文庫、図書館相談、移動文庫を展開していた。巡回文庫については、「毎月一回、各部落毎に30冊内外の本の貸出しと回収の便をはかり読書相談や子供の時間、映写会などを行」っていた。図書館相談については、「図書館業にあかるい図書館員が、公民館図書館や学校図書館などへ出向いて相談を受け指導」していた。移動図書館は「のびていく子供達と共に両親もよい本を読んでほしいと毎週土曜日100冊の本を積みこんで各教育隣組を訪問し」、「貸し出した本は原則として図書館カウンターへ返本」していたようである。移動文庫は移動図書館と異なり、「島内の各部落で読書指導、英語学習、子供の時間、スクエアダンス、講演会、座談会、映写会など文化会館の館内活動をそのまま移動したかたち」であった。つまり、八重山琉米文化会館について、当時の活動実態を示した上での影響や意義を断言することまでは至らないものの、新しい文化を形成してゆく拠点としての意義を完全に否定することはできないと思われる。沖縄各地で時間の止まった公民館図書室が存在するのも、おそらく、その時代に内実を形成していったのだと思われる。占領下の沖縄では、本土の書籍や雑誌は、洋書扱いであった。すなわち、日本本土から輸入するには、輸送費用ばかりでなく、書店にとってすべて買取制で返本は不可能であり、市中に出回っている書籍は少量かつ高価なものであった。そのなかで、占領行政として、沖縄全土に図書をいきわたらせる意義は、同時代の本土の状況とは大きく異なる。また、司書が軍用機でハワイまで行き、ハワイ大学にて図書館学の研修をしたことが注目される。

4. 米国民政府の広報機関としての位置づけ

このように、八重山琉米文化会館に評価すべき点があったにもかかわらず、冒頭で触れたように占領政府が去ったあと、公民館図書室の時間が停止したようになったのは、八重山琉米文化会館の敷地だけではなく八重山地域全体を巡回して精力的に活動していた理由が、米国政府の強い意図を背景としていたからにはほかならない。確かに『文館案内』には、「琉球とアメリカの文化交流の場、また理解と親善を深める場として1952年4月米国民政府によって建てられ」た施設であると書かれており、友好的な場所であるともいえる。しかし、琉米文化会館の職員の身分は、政府広告部職員だったのである。そもそも、占領当初は沖縄側からの求めで始まった図書館計画であった。しかし、その

後、情報センターへ、そして、軍事的色彩を払拭するために琉米文化会館と名称変更されてゆく過程で、性格を変えてゆくことになる。日本本土占領期におけるCIE図書館と比較しつつ漢那憲治は、占領当初の状況を次のように述べている²⁹⁾。

「占領下の日本において米国の主導でCIE図書館を全国各地に設置されたのは、米国の対日教育使節団報告書によるところが大きい。さらに、米国の対外的な広報・文化活動政策(public diplomacy)の一環ともみなすことができる。他方、沖縄の場合は、1945年6月23日の敗戦から1951年9月8日の対日講和条約が調印されるまでの期間は、本土の間接統治と異なって軍政府の直接統治時代であったから、米国の対日教育使節団報告書や広報・文化活動の反映は全く見られなかったのである。よって、沖縄の場合、沖縄側からの軍政府への働きかけで、戦後の図書館復興は始まったわけである」。

このように始まった図書館復興が、琉米文化会館計画に転換されてゆく様子を、齋木は次のように指摘されている³⁰⁾。

「もともと『占領』と『民主主義』という内部矛盾をはらみつつスタートした事業であったため、住民の文化と教養向上に貢献した点と、占領のメリットにならない部分は切り捨てられた点の二面性があった」。

「1947年5月、すでに米軍政府は情報センター(Information Center)計画を承認しており、沖縄民政府の図書館計画の認識とは必ずしも一致していなかった。1951年2月、床面積489平方メートル、閲覧室、講堂、音楽室、事務室が完備された中央図書館が崇元寺近くに移築されるや軍政府情報教育部の管轄となり、『沖縄中央図書館』の看板は下ろされ『文化情報会館』となった。その後まもなく『那覇琉米文化会館』と名前を変え、石川、名護にできていた図書館もそれぞれ独立した。翌52年2月に『八重山琉米文化会館』、7月に『宮古琉米文化会館』が加わり、沖縄全体で5つの文化会館が誕生することになった。その時点で首里の分館だけが独立して首里図書館となり、のちに琉球政府立中央図書館となったのである」。

「太平洋の要石(Keystone of the Pacific)として沖縄の基地を拡大し、強化することは米軍にとっ

て重要な政策だった。しかし米軍の支配権が確立していくにつれ、沖縄住民の抵抗運動も激しさを増してきた。そこで沖縄統治を円滑に遂行するために『民主主義のショーウィンドー（Showcase of the Democracy）』として設置された。「戦前は郷土資料が豊富なことで知られ、沖縄研究の宝庫といわれた県立図書館を知る者には、アメリカの出先機関のようになってしまうことへの抵抗感は根強かったと考えられる。すなわち、出発のはじめの時点で米軍側の『琉米文化会館』設置意図と、県民のための『公共図書館』復活を願う図書館関係者の間にはすでに意識的なズレが生じていたのである」。

「沖縄では公共図書館の設置が、本土に比べてひどく立ち遅れていたのはなぜか。それは権力が琉米文化会館だけに力を入れ、競合する施設の公共図書館を顧みなかったからである。占領下でも学校図書館法は獲得できたが、公共図書館法がついにできなかったのは同じ理由からであろう。復帰後すべての琉米文化会館は日本政府に買い取られ、所在各自治体に無償で引き渡されたが、それを直ちに図書館として実質的に活用した自治体は一つとしてなかった。自治体側にもまったくその用意がなかったのである。何十人というベテラン司書たちが、復帰と同時に職を失った。その前日までなにひとつの約束さえなく。そのとき、住民も動かなかった。与えられた施設にすぎなかったのだ、といったらよいのか。その後何年もたって自治の主人公としてまちに図書館を作るとき、かつての利用体験が生きてきたのである」。

このように、1947年の4月から11月にかけて、4館の沖縄民政府立中央図書館および分館が開館し、中央図書館以外は、沖縄民政府の手からはなれ、琉米文化会館へと名称を変更していくことになる。その事實は、沖縄本島においては、極めて深刻であり、極めて凄惨であった沖縄戦を経験した後に、いかに反米色を薄めるかという重要な意味合いがあった。それは、反米側としては、敵対的な組織であり、むしろ沖縄の自律を妨げたという主張がありうるのも頷ける。「昭和20年（1945）米軍の沖縄攻略によって、沖縄学の宝庫であった県立沖縄図書館をはじめすべての図書館が姿を消し、殆どの学校、教育施設が焼失又は破壊され、多くの同胞を失い、失望と混乱の中にみじめな敗戦を迎えた」³¹⁾。二度と手に入ることのない資料群を失った悲しみ、すなわち文化と歴史を奪われた嘆きは、新しく

て魅力的な資料を与えられることでは癒えなかったのだろう。

八重山琉米文化会館の状況については、三木と豊川による演劇公演のエピソードが参考になる。三木によると³²⁾「米軍に抵抗して大学を追われた琉大事件の学生の中に、八重山高校出身の先輩がいて、石垣に戻ってきた。その先輩が文館のホールを使って演劇をすることになり、ちょくちょく遊びに行って館員から目をつけられていた私が、あろうことか主演に抜擢された」。「反米運動で琉大を追われた人」（＝豊川）「が、親米の拠点とも言うべき文館で演劇をするというのも、沖縄本島から遠く離れた八重山だからできたのか、とかくおおようではあった」。この豊川自身も次のように述べている³³⁾。

「アメリカが沖縄統治にどれだけの識見と手腕を持っていたのか。国是とした民主主義をどのような形で、沖縄に根づかせようとしていたのか。『アカ』『共産主義の手先』『反米者』の烙印を押されて琉大を追われた私が、郷里の八重山でほとんど毎日のように、米民政府の出先機関である文館、それも親米派の拠点ともいうべき場所に足繁く出入りしていたのである。私を咎める人は、誰ひとりいなかった。なんとも不思議といえば不思議な。思い返せば思い返すほど、いまでも『なんで～？』と小首を傾げたくなるような、釈然としない奇妙な話ではあった。年の暮れも近づいたある日、文館職員の屋部憲一さん（琉大英文科2期卒）から、『クリスマスに劇をするのだが、演出をみてくれないか』という話があった」。「クリスマスの夜の公演は、町の人びとの間で話題になるほど大好評だった。気を良くした館長の長田信一さん（米留帰り、故人）の暗黙の了解もあり、『八重山文館第一回演劇発表会』という冠付きで、なんと年明けての再演ということにまで、話は大きくなったのだった」。

このように、本島の琉米文化会館との比較状況までは明らかではないものの、八重山琉米文化会館は、政策遂行側と住民側の双方にとって、抑圧的な機関としての性格が薄かった様子がうかがえる。また、アメリカの宣伝色は、占領当初よりも、占領終期のほうが弱まっていたことは想像できるが、それでも、1970年時点においてもなお、当初の文化会館の目標である共産党特有の破壊、侵略、残忍性など周知せしめることや、米国の国策並、米国の琉球政府への協力を示す活動、

その役割りなど周知せしめることが維持されていた。

「文化会館運営の資料送付について（石垣市長
殿1970年9月）

設立

八重山全住民の文化の振興並水準高揚の目的と、
琉米相互の理解と親善の場として1952年4月米国民
政府が石垣市有地に設立した。

文化会館の目標

1. 琉球人の能力を啓発して自治、自立に資する
こと。
2. 琉米相互の文化に対する理解と親善を創造す
ること
3. 共産党特有の破壊、侵略、残忍性など周知せ
しめること
4. 図書館、プログラム活動を通じて郷土の文化、
社会、教養、経済の向上と育成に努めること。
労働者の擁護を図ること。
5. 米国の国策並、米国の琉球政府への協力を示
す活動、その役割りなど周知せしめること

例、国民指導員計画

留学生制度

学校建築、橋、道路、上下水道

才入財源並その利用法など」

この資料について、形骸化した行政文書なのか、そ
れともアメリカの宣伝色が維持されていたのかという
点で、当時における実質的な意味についてはさらなる
検証が必要である。

5. 本土復帰と存続に向けた訴え

ところで、本土復帰にあたり、八重山琉米文化会館
の職員はすべて解雇を言い渡された。しかし、職員に
よる粘り強い存続運動により廃止を免れた。存続にむ
けた他の運動や市町村長会の反応などの概要について
は今後さらなる研究が必要であるものの、元八重山琉
米文化会館職員のインタビューによると³⁴⁾、存続運動
は困難を極めたということであった。それは次の「琉
米文化会館の存続要請方お願いの件」と題する請願に
よりみてとることができる。

「1969年11月の佐藤首相とニクソン大統領の会
談で沖縄の1972年復帰が決定されて後、種々の問
題が持ち上がっています。私達琉米文化会館の58
名の職員も米国民政府広報局の従業員であります

ので、当然これから1年ないし2カ年の間に人員
整理の対象になることと思われます。そして民政
府の解消と同時かそれ以前に琉米文化会館の事業
の縮小も充分考えられます。

従つて現在の琉米文化会館職員の身分の保障と現在
の施設の継続的利用と運営を日本政府並びに琉球政府
の責任で御検討していただきたいと切望するものであ
ります。

現在の文化会館が日本政府に売却、譲渡される事を
前提に、ここに私達文化会館職員は、今後の文化会館
のあり方について、市町村長会で御検討していただき、
貴会より復帰準備委員会に文化会館の存続要請方お願
い申し上げます。

貴会のご支援とご協力をかさねて要望いたします。
1970年3月25日」

これまで、アメリカの広報活動に位置づけられてい
たことからの大きな転換点であり、自立の第一歩で
あった。沖縄の市民にとっての琉米文化会館の必要性
や市民との関係構築について今後の研究が望まれる。

興味深いのは、次の資料からもわかるように、市民
が自ら学ぶ拠点として生まれ変わることがキャッチフ
レーズであったのではなく、広報局の職員としての思
考様式からして当然ではあるが、日本文化を広報する
拠点として琉米文化会館を位置づけている点である。
下の資料から感じ取れるのは、奉仕する相手は市民で
はなく、日本という新しいご主人様である。当時の沖
縄にとって、日本は外の国だったのである。

「琉米文化会館の教育文化センターとしての活用
について」

「(1) 趣旨

戦後25年間、米国の法律及び諸制度と日米両国
の折衷的諸制度の下で沖縄の一般社会人は教育を
受け生活をして来た関係上現在の日本の諸制度、
司法、立法、行政についての正しい知識の持ちあ
わせがないと言っても言過ぎではありません。

従つて復帰後の大きな変動による混乱を避ける
為にも又日本の諸制度、法律に親しみを覚えさせ
る為にも、日本政府並びに琉球政府の責任と財政
で現在の五つの（那覇、石川、名護、宮古、八重
山）琉米文化会館を継続運営して行く必要がある
と痛感するものであります。

復帰後、沖縄の人々に日本という国又は政府に
失望と失意を抱かせない為にも又逆に復帰して本
当に良かったと実感として沖縄県民が持つように

なる為にも、日本という国について正しく理解及び認識させる事が最大の急務と考えます。その再教育の場として現在の琉米文化会館を”教育センター”と改名して継続運営して行く必要があると思います」。

「(3) 事業関係説明

現在各文化会館には、主婦の生活大学、婦人学級、青年学級、婦人読書会、琉米婦人友の会、ストーンゲイトクラブ等の組織がありこれらの組織を拡大発展させて下記事項の基礎的知識を普及させ、その他諸事業団や協同体にも現文化会館の施設を高度に利用させて沖縄の現行法規と日本の法規の相違点を充分説明して趣旨の徹底に努める必要がある。

- イ. 日本の国土、歴史、地理、及び国力
- ロ. 諸教育制度及び教育関係法規
- ハ. 諸選挙制度及びその法規
- ニ. 諸福祉制度およびその法規
- ホ. 交通法規
- ヘ. 諸税制その関係法令
- ト. 諸補償及び補助制度
- チ. 第一次産業関係法令
- リ. 金融政策及び制度
- ヌ. 日本の安全と防衛
- ル. 日本と諸外国との関係
- オ. 国と県及び市町村との諸関係等」

このような経緯をたどって、石垣市立文化会館として再出発した。今回の研究では、石垣市立文化会館の事業内容がどのようにして決定されたのか、また上記「琉米文化会館の存続要請方お願いの件」や「琉米文化会館の教育文化センターとしての活用について」がどのように取り扱われたのかについて深めることが不足しているものの、次の石垣市立文化会館の運営方針からは市民の図書館へと急速に変化してゆく様子を見出すことができる。

「運営方針

地方自治法の規定にもとづく石垣市立文化会館設置条例により「市民の福祉増進を図り、教育文化の発展に寄与することを目的として以下の事業を行う。

一般市民の要求に応ずる図書の選定、購入、その他必要な資料を収集、整理して一般市民の利用に供する。

図書の貸出し、調査、研究のためのレファレン

ス・サービスを行う。

市民の文化向上のための講演会、研修会等を行う。

その他、市民の情操教育等に必要なる事業を企画、実施する。」

上記の運営方針に着目したのは、市民へ教え込むという観点が入っておらず、かわりに「市民の福祉増進を図り、教育文化の発展に寄与する」ことが目指され、それを証明するかのように図書選定が市民の要求に基づいていることが定められている点にある。もちろん、市民の文化向上のための講演会、研修会や市民の情操教育等に必要なる事業の内容や規模によっては、石垣市立文化会館が広報色のある施設である可能性も考えられる。しかし、当時の活動内容まで今回の研究が及んでいない以上、規範的な側面に特に着目するならば、図書館が思想善導の機関としての性格を帯びているか否かのメルクマールとして、選書理念が大いに着目できることがわかる。

石垣市立文化会館は、1990年に石垣市立図書館として全面改築され³⁵⁾、すべて新しい本に入れ替わった。次に示す石垣市立図書館の運営方針³⁶⁾でもわかるように、往年の広報色のない、市民の図書館として運営されている。

「高度情報化社会の現代、多様化する市民の学習要求に対応し、幼児からお年寄りまですべての市民が活用する図書館を目指し、市民感覚と生活の密着した図書館資料（本、雑誌、視聴覚資料、絵本、新聞、その他の図書館資料）の充実に努めるとともに、専門的知識をもつ図書館員（司書）によるレファレンスサービスを強化する。尚、資料の十分な活用を図り、市民の知的要求に応えるために図書館ネットワーク化を強化して図書館の使命を十分に果たせるようにする。

さらに日本最南端の情報センターとして、広く東南アジアにも視野を拡げ、南の玄関口として情報発信の拠点づくりに努める。

また、図書館は資料のみではなく、人と出会い、自己と出会う空間でもある。自己教育の場であり、生涯学習の拠点として地域文化の活性化と発展に寄与することを目標とする」。

6. 沖縄県立図書館八重山分館との関係

さて、八重山琉米文化会館について結ぶ前に、沖縄

県立図書館八重山分館に触れねばなるまい。先にも触れたとおり、石垣島では、なぜ県立と市立の2つの市民密着型の図書館が近隣に並立しているのだろうかという疑問である。一般的な状況としては、県立図書館よりも市立図書館のほうが市民の日常と密着していることが多い。しかし、石垣市立図書館の源流である八重山琉米文化会館は、市民自らが欲し、手に入れたものではなく、アメリカの広報機関であり、戦後に創設されたものである。一方、沖縄県立図書館八重山分館では、ふつうは市立レベルのサービスに含まれる活動に力点を置いているようにみえる。たとえば、中学生や高校生の職場実習、やえやまようちえん児の図書館見学、子ども図書館まつり、読み聞かせ、親子プラモデル教室、折り紙教室、お琴教室、八重山文化研究会活動、八重山文化講演会講座、ミュージシャンを招いた屋上ミニライブを行ってきている³⁷⁾。もちろん、八重山地方には沖縄県石垣市だけではなく、竹富町と与那国町により構成される沖縄県八重山郡が含まれており、離島へのサービスに重点をおくのであれば、県立図書館分館の存在意義が認められる。しかし、本稿では沖縄県立図書館八重山分館の歴史性に着目したい。沖縄県立図書館の起源である八重山通俗図書館の成立は大正時代にさかのぼる。

「八重山郡教育会が大正天皇の〈御大典事業〉として、1914年(大正3)5月に設立。安東重起が初代館長となり、幹事2人、司書1人をおき、民家を借りて開館。部会から毎年75円を支出して運営したが、思わしくなかった。17年2月に岩崎卓爾が二代目館長となり、彼の献身的な尽力によって維持された。32年(昭和7)2月真珠王の御木本幸吉が建物を寄贈したので、そこへ移転して、第二次大戦まで八重山に文化の光をともし続けた」³⁸⁾。「近代図書館の理念の1つである図書館間相互協力の思想の萌芽をこの図書館に見ることができる。即ち台湾基隆の石坂文庫との貸借である」³⁹⁾。

この点、新城安善は、通俗教育における思想善導との関連で位置づける⁴⁰⁾。

「大正期の『通俗教育』政策の基調は、端的に言えば第1次世界大戦(1914～1918)を契機に、革新的な労働運動・農民運動によって支えられた民主主義及び社会主義思想の胎動を抑止する政治的力学の不可能な事態を予知した政府当局が、い

わゆる国民教育的『思想善導』への処方箋をうちだした点にあった。つまり、一応学校教育を終了した者を対象に、読書習慣の生活化を図ることによって、知徳兼備の国民を育成できることに政府当局が確信をいだいていたわけである。政府当局の通俗教育の施策は沖縄県にも示達され、八重山郡教育会においても民衆にかかる経済的事情を考慮し、早急に公共的図書館設立の必要性—社会教育の趣旨に合致する決意をあらたにしたものだ、と考えられる」。

これに対し、行政主導の側面よりも、民間有志の努力を強調するのが三木健である⁴¹⁾。

「岩崎は賛助会員制度をつくり、民間の篤志から寄附をもらい、図書の寄贈をうけるなどして、悪戦苦闘している」。「昭和に入ると大不況が吹き、再び苦境をむかえる。が、石垣島の川平湾で真珠の養殖を手がけた真珠王・御木本幸吉の篤志によって窮状から立ち直る。1937(昭和12)年には、館名も『八重山図書館』と改められている。このように、この図書館には、島の人たちの島を思う熱い思いが込められている。不況の中での民間有志による血みどろの戦いであった」。「それにしてもこの時期に、沖縄県内にこのような地域図書館が創られたのも、めずらしいのではないか」。「戦後になって1952(昭和27)年に琉球政府立図書館に、さらに1972年の日本復帰により、沖縄県立図書館に引き継がれて、現在に至っているわけである。このような歴史的な経緯を見てもわかるように、八重山群教育会という行政組織を母体にして発足したとはいえ、民間有志の並々ならぬ努力によって維持されてきたのである。これからもこの志を、忘れてほしくないと思う」。

八重山琉米会館の影響と沖縄県立図書館八重山分館とが住民からどのような認識の違いがあったか、あるいはどのように影響が区別されるのかについては今後さらなる研究が必要と思われるものの、このように、行政主導の側面よりも民間主導の側面が強い歴史を有することが、現在でも沖縄県立図書館八重山分館が、住民に密着したサービスを行っている原因のひとつであると解釈しうる。しかし、そのことは、八重山琉米文化会館が石垣市立図書館になり、市民の図書館へと変貌してゆくなかで、複雑な状況をもたらした。三木は次のようにも述べている。

「私は中学生のころ、わが家がこの図書館に近いこともあって、時々、図書館の門をくぐった。日本復帰以前のことで、場所はいまの分館と同じだが、赤がわらの古びた木造のころである」。「あのころと比べると、当然のことではあるが、設備も図書も格段に良くなっている。ただ欲を言えば、もう少し、八重山分館としての特色を出してもいいように思う。特に石垣市立図書館との、ある程度の機能分担が、あっていいように思う。何をどの程度分担するかは、双方で協議することが必要だろう。いずれにしても八重山分館が市民のニーズにこたえて、これからもその機能を発揮されんことを期待し、90年の歴史を寿ぎたい」⁴²⁾。

三木の憂慮は現実化し、沖縄県立図書館宮古分館を含め、沖縄県立図書館八重山分館の廃止が現在議論されている。沖縄県議会は2009年3月に八重山分館を閉鎖することを決議した。その理由は、石垣市立図書館に機能を代替できるということである。石垣島に図書館は県立と市立の2つしかない状況で、市立図書館ネットワークのハブとしての機能を十全に果たせることもなく、また、資料保存機能にしても、遥かに巨大な市立図書館にかなうわけもない。これに対して、石垣市議会により反対決議がなされた⁴³⁾ほか、各種の反対運動が行われ⁴⁴⁾、県教育委員会が廃止方針を当面見送る状況にある⁴⁵⁾。八重山の人びとの図書館への意欲は、今もなお息づいているようだ。

7. 考 察

沖縄における社会教育の歴史については、小林文人と平良研一により組織された戦後沖縄社会教育史の研究がランドマークとなっている⁴⁶⁾。沖縄占領下社会教育の特質を総括して、(1) 占領政策の文化的側面として、単に統制的であるだけでなく、ときにすぐれて啓蒙、普及、保存といった奨励的な側面をあわせもっており、矛盾的な性格と本質を鋭くとらえておく必要がある(2) 施設・職員体制・財政等の条件整備は低水準にとどまっていた(3) 中央集権的であって、地域分権・自治的な社会教育は未熟であった(4) 琉球政府行政を通しての間接的な社会教育支配と、直接的な「琉米文化会館」等による諸活動との二重構造をなしていた(5) 具体的な活動の展開において非政治的、非思想的、非運動的であった点を示している。

以上を本稿にあてはめると、(1) 統制的であり奨励的という矛盾する性格については、本稿第4章で

の米国民政府の広報機関としての位置づけと、本稿第3章における新しい文化を形成してゆく拠点としての意義の両面が、八重山琉米文化会館にも存在していた。(2) 施設・職員体制・財政等の条件整備は、(3) 中央集権的な側面と密接な関係にある。八重山琉米文化会館独自の選書が行われていなかった点からすると、地域分権・自治的な社会教育として八重山琉米文化会館の図書館を位置づけることは難しく、したがって、非中央集権的な条件整備に力が入れられていなかったことがわかる。(4) で示されている間接的な社会教育支配体制については、琉球政府立図書館を示すことができ、(5) 趣味・実技、文化・芸能などの非政治的領域に傾斜する点は、八重山琉米文化会館においても散見されている。

このうち(1)について、さらに検討をすすめるならば、民主主義における治者と被治者の自同性の問題が前提として存在することがわかってくる。主権者たる国民が法律に従う正当性は、国会議員を国民自らが選び国政を委ねるシステムに裏付けられている。国民は、統治する立場と、統治される立場を兼ね備える。自分のことは自分で決めるというシンプルな原理により、民主主義は裏付けられる。占領期の沖縄においても、立法機関として、選挙により選ばれる議院により構成される立法院が存在していたことからすると、民主主義は一応確保されていたといえる。しかし、立法院の議決に対して、高等弁務官による拒否権が留保されていた。個々具体的な権力の行使へ現実に民意が反映されるという権力性の側面でさえ、米国民政府の強い影響力が存在していたなかで、権力の行使が主権者に由来するという権威的な側面としての、治者と被治者の自同性についても不完全なものであった。人権理論が想定する自由の実現とは、個人に対する公権力による妨害排除であり、不完全な民主主義のなかで、国際的なパワーバランスを理由に民衆の意思実現を阻害する側面が米国民政府に認められたとともに、戦前の検閲体制で培われた個人の世界観を基礎とした代表民主制の瑕疵を治癒し民衆を解放する側面も存在した。しかし、時間の経過とともに国際情勢が変化し、また、戦後の社会状況が安定してくるにつれ、沖縄における自由の所在も変化してゆく。八重山琉米文化会館ならびに石垣市立図書館と沖縄県立図書館八重山分館との関係性を本稿で論じたのも、その文脈に基づく。終戦直後は戦争中は知ることができなかった情報に触れることのできる喜び、すなわち、図書により新たな沖縄の建設および心の安らぎへの解放感が存在したというモデルが仮に存在したならば、いわゆる北風と太陽の

ように、民衆の心を開いてこそ教え込むことが可能であり、部外者としての米国との関係のなかで培われた個人の主体性の変化が反映されていると考える。

ここまで、琉米文化会館の歴史と評価について、とくに八重山琉米文化会館に焦点を絞りつつ図書館と自由の関係を検討する材料として紹介してきた。全体を特徴付けるのならば、「離島の占領政策」という言葉に集約できるだろう。本土の人びとからすると、遙か南西における別世界の出来事と感じるに違いない。しかし、日本を極東と位置づける欧米中心の世界地図では、国際社会に一番近いのはむしろ八重山地方なのである。スケールの違いこそあれ、日本全体も国際的には小さな島国であり、諸外国の政治的バランスの影響を今も強く受け続けている。グローバル化する現代社会のなかで、日本社会や我々の思考様式への認識を深めるために沖縄は大いに参考になる事例であると考えられる。たとえば、ともするとモノカルチャーの推進に陥りがちの日本社会において、他の文化を教え込む場所として図書館を位置づけるのか、それとも、共生のための相互理解の場であるとするのかは、紙一重であるといえよう。

より本質的には、図書館と教育の関係が問われている。琉米文化会館について、図書館の振興という正の側面と、教化宣伝機関という負の側面があったと並列化するだけではなく、図書館の人格形成与える影響と向き合ってゆくことが大事であると思う。確かに、今からすると、図書館の自由に違反する思想善導の機関として琉米文化会館を位置づける余地があることは、事実的な側面についてはさらに検討する必要があるとしても、規範的な側面からは否定できない。その反面、本当の民主主義を根付かせるためのやむを得ない例外的・時限的な措置であったとも考えられる。すなわち、思想の自由や表現の自由に関する一般的なルールからすると許容範囲を超える場合であったとしても、そもそも正常な民主主義基盤が存在することが前提となる事項については、民主主義を定着させるという、やむにやまれぬ事情により必要最小限の例外的制約を受ける緊急避難的な措置が認められると考えられるかもしれない。しかし、図書館界に警鐘を鳴らすのはどちらでもなく、人びとを自由にするために真剣に行われていた活動であった点である。沖縄文化部による1946年の『社会教育指導要項』には次のように記されている⁴⁷⁾。

「日本はどうして戦に敗れたか、その原因は原子爆弾やソ連の参戦が重大な原因となつているが、

もっと深く考えて見ると他にも原因があると思う。即ち日本の最大の武器であった『大和魂』もアメリカの科学力には勝てず遂に屈伏させられたのである。そこで敗戦の原因は、アメリカの国力を無視した戦争指導者の誤算、つまり大東亜戦争を始めたことがそもそもの間違いであつたと思う。そうして最も感ずることは科学力の甚だしい相違の点である。その他、日本国民道德の低下政府指導の禍誤、軍閥の横暴、ナチズム模倣の失敗、陸海軍の相剋摩擦による失敗、労働階級無視の失敗、宗教政策の失敗、教育の失敗、世界的知識欠如の失敗等である。要するに世界の実情を知らず高慢で無知で無反省で、唯我独尊で博愛心なく只徒らに神がかり的言辞を弄し戦争を開いたことが今日の破局を招いたのである」。

そして、「新沖縄建設に対する信念を培う」目的のために、「生活の更新と趣味の向上を促し以て民心の安定を図り文化人としての教養を高める」方法で、「あまりに封建的な過去の生活の桎梏から解放して人類意識を高揚し自由意思の発動によつて家庭並に社会一般の諸問題を解決」することを社会教育に期待したのである。この要項がどれだけ琉米文化会館に影響したのかについては、今後さらなる研究が必要であると思われるものの、琉米文化会館の諸活動も、映画の上映や読書振興活動をはじめとする、新しい生活様式や最新知識を、琉球のすみずみまで広めるための啓蒙活動により迷信や封建的性格から解き放ち、真のデモクラシーへの啓蒙を行う事で人びとを自由にする活動であったと考える余地が認められる。それは、「国家による自由」を意味し、知的自由の擁護、あるいは、知る自由の保障に向けられている。他者に意思を伝達する欲求たる言葉の流通空間が図書館であるならば、両立できない意思の狭間で「国家からの自由」だけでは解決できない公共性をどのようにとらえるのか。すなわち、パブリック・フォーラムとしての図書館における、パブリックから教育的な側面を回避しきれないなかで、個人の人格形成に、いかなる程度、どのような方法で踏み込むことが妥当なのかという課題を提起するのである。心を鎮め新しい社会へ向けた活力を生み出すために、琉米文化会館政策は積極的に進められ、専門職としての訓練を受けた熱意溢れる職員が存在も認められる。冒頭で紹介した『守礼の光』で言及されたように、知識はわれわれに理解と自信をあたえ、生活をよくする合理的方法を教える、という使命感が職員に存在したことは、現在の我々にも大いに参考にな

るに違いない。そうであるからこそ、米国側の事情による人びとが受け取る情報をコントロールする必要性、情報チャネルが限定された離島という状況における情報隔離の有効性、非権力的な穏やかな側面による妥当性が当時の社会情勢のなかで仮に認められてもなお、琉米文化会館の研究を今後も進めてゆく必要があることは現在においても同じであり、たとえ必要かつ可能で穏当であっても、図書館が情報流通の抑制手段として使われることには警戒が必要である。謙抑性の探求が我々に常に要求されるなかで、無謬性を本質的に否定してこそ、図書館のなかの民主主義は息づくものと思われる。

8. おわりに

最後に、筆者が研究するうえでの今後の課題について述べる。まず、占領期の沖縄と八重山における地域性および歴史についての理解をさらに深める必要がある。また、沖縄における公民館図書室のサービスと地域の図書館サービスの特性、および返還にともなう制度との関連性について、現在の沖縄県立図書館八重山分館の活動を含め特に返還後の状況について事実面のさらなる調査が求められよう。

注

- 1) 沖縄社会教育の歴史と現状、伝統と文化の継承状況に関して、本研究は科研費(18330167)「『伝承・習い事』文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究」研究代表者：渡邊洋子(京都大学)研究分担者：中島純(新潟経営大学)・相庭和彦(新潟大学)・前田稔(東京学芸大学)・芳澤拓也(沖縄県立芸術大学)の成果を生かしたものである。助成対象とは直接は関連しないものの、論文作成に大いに寄与している。This work was supported by KAKENHI (18330167). また、図書館文化史研究会からの多大なるアドバイスを受けた。
- 2) 2004年12月に今帰仁公民館および具志堅公民館を訪問。
- 3) 本稿では引用先の文献にあわせ「図書室」と「図書館」の用語を特に意義の違いなく混在させることにしたい。同じく、公民館的な活動を含めて図書館と位置づける場合と、もっぱら図書の提供を意味する場合とが混在している。
- 4) 2005年1月に沖縄県立図書館本館にて。
- 5) 2003年5月に宮古島を訪れ、特に当時の平良市立図書館では図書館の概要の説明を受けた。
- 6) 特に、長年八重山琉米文化会館で司書をしてこられた与儀玄一氏へのインタビューおよび資料提供(2005年12月)が本稿の柱となっている。
- 7) 「伝承・習い事」研究会における研究成果として研究代表者である渡邊洋子の論考がある。渡邊洋子「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性—沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取り組みを手がかりに(〈ローカルな知〉の可能性—もうひとつの生涯学習を求めて)」『日本の社会教育』日本社会教育学会、2008, p. 130-144. 渡邊洋子「沖縄における『伝統芸能』と生涯学習・社会教育」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』No. 7, 2008, p. 63-81.
- 8) 沖縄の社会教育研究に関する基本的な文献として、小林文人・平良研一編著『民衆と社会教育—戦後沖縄社会教育史研究—』エイデル研究所、1988. 戦後沖縄社会教育研究会編『沖縄社会教育史料』(第1集～第7集)戦後沖縄社会教育研究会、1977-1987. 八重山琉米文化会館の蔵書リストおよび分析について、漢那憲治「米軍占領下の沖縄における図書館についての総合的研究：八重山琉米文化会館の残存蔵書の書誌データ」『梅花女子大学文化表現学部紀要』No. 2, 2004, p. 175-218 [引用2009-4-28] <URL: <http://ci.nii.ac.jp>>. ほかに、古波蔵剛『占領地における米国の社会教育施設—住民の語りの中に見る琉米文化会館の受容—』日本大学、2000. が重要文献であるとされているが、非公開の修士論文であるため、今回は確認できなかった。
- 9) とくに、沖縄の米軍による占領体制についての知識が不足しているため、本稿全体が不正確になっている。たとえば、1950年以降、米軍は、沖縄本島に米国民政府(USCAR)を敷き、宮古には宮古民政チーム(MCAT)、八重山には八重山民政チーム(YCAT)を敷いた点の理解が十分に深まっていない。また、沖縄本島は戦禍をうけ米軍基地がひしめいている一方、宮古には米軍の通信基地があるが、八重山には全く米軍の基地がない背景を押さえていない。
- 10) 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983, 956p. なお、沖縄の図書館全般の歴史的状況については、『沖縄の図書館』編集委員会編『沖縄の図書館』教育史料出版会、2000が詳しい。
- 11) 「あなたの役にたつ琉米文化会館」『守礼の光』1963. 3, p12-13.
- 12) 『文館案内』八重山琉米文化会館、年代不詳(おそらく1960年代後半). 本資料を含め、元八重山琉米文化会館職員との与儀玄一氏に貴重な資料を頂戴した。
- 13) 資料の移管と現在の資料保存状況の関係、および移管後の経緯については、さらに研究をすすめる必要がある。
- 14) 現在も保管されていることは、2008年12月に電話による問い合わせにて確認。

- 15) 石垣あかね「琉米文化会館児童書リスト作成記」『沖縄図書館協会誌』No. 7, 2003, p. 59-60. 漢那憲治「＜資料＞米軍占領下の沖縄における図書館についての総合的研究－八重山琉米文化会館の残存蔵書の書誌データ」『梅花女子大学文化表現学部紀要』No. 7, 2004. 12.
- 16) 内原節子「残された八重山琉米文化会館の蔵書」『沖縄図書館協会誌』No. 7, 2003, p. 58-59. 当時の職員がいないとの記述からすると文化会館図書室の蔵書が移管がすべて八重山琉米文化会館の蔵書であったか否かについて、資料の移管状況の説明としては十分な裏付けがなされていないと考えられ、今後の研究がさらに望まれる。
- 17) 宮良恵次「琉米文化会館時代の資料を巡って」『沖縄県図書館協会誌』2004年第8号, p67-68.
- 18) 「座談会 宮古・八重山図書館調査報告」『沖縄県図書館協会誌』1997年第3号, p128.
- 19) 齋木喜美子「琉米文化会館の児童文化活動・児童書」『沖縄図書館協会誌』No. 8, p59.
- 20) 前掲「琉米文化会館の児童文化活動・児童書」p65.
- 21) 前掲「琉米文化会館の資料を巡って」, p68.
- 22) 漢那憲治, 山田勉「沖縄(琉球)図書館史Ⅱ—現代(1945～)—」『沖縄キリスト教大学紀要』1991, 第21号, p. 121.
- 23) 『沖縄の図書館沿革小史—明治から現代まで—』沖縄図書館史研究会, 1990, p. 13.
- 24) 三木健「思い出の八重山琉米文化会館」『沖縄図書館協会誌』No. 7, 2003, p. 54.
- 25) 豊川善一「記憶の底から—八重山琉米文化会館で演劇公演—」『沖縄図書館協会誌』No. 7, 2003, p. 56.
- 26) 『文館案内』によれば、次の催しが行われていた。毎週の定期プログラムとして、日曜日にカブスカウト集会、ブラウニーの集い、ガースカウト、月曜日に小学英語クラス(A)、中学英語クラス(A)、小学図画教室、TV英会話クラス、移動文化会館、火曜日に子供の時間(低学年)、小学生読書クラブ(A)、科学玩具教室、巡回文庫と読書指導、水曜日に幼児英語クラス、小学生読書クラブ(B)、YOO少女合唱団、スクエアダンス、一般英会話クラス、巡回文庫と読書指導、木曜日に子供の時間(中学年)、小学読書クラブ(C)、中学3年生読書クラブ、中学英語クラス(B)、混声合唱団、市内出張映画会、出張英語講習会、金曜日に小学英語クラス(B)、中学2年読書クラブ、中学美術クラス、移動文化会館、土曜日に、ボーイスカウトの集会、子供の時間、英語劇クラブと学生演劇クラブ、移動図書館(市内教育隣組)を実施していた。月1回の定期プログラムとしては、ジャズレコードコンサート、婦人グループ若松会、婦人グループひまわり会、ボーイスカウトコミッショナー会、婦人読書グループ三木会、キャノンクラブ、ガールスカウトリーダー会、八重山精神文化推進協議会、親子クラス、切手趣味の会、チャール会八重山、八重山短歌会、カメラクラブ、女教師のグループなごみ会、寿楽会、生活教室が行われていた。月2回の定期プログラムとしては、民謡を学ぶ会、ママの人形劇クラブ、書道教室、青年の集い、一郷土史教室、郷土舞謡教室、経済研究グループが行われていた。また、特別プログラムとして、文化講演会、講習会、座談会、討論会、展示会、演劇公演、音楽会、諸種の発表会が行われていた。
- 27) 現在のところ、八重山にて占領政策と抵触した場合の事例や説明を具体的に紹介するに至っておらず、今後のさらなる研究が必要である。
- 28) 石垣島出身者2名(沖縄本島在住・八重山琉米文化会館を少年時代に利用・50歳代・男性・2005年、八重山琉米文化会館をあまり利用していないが存在を知る・東京在住・70歳前後・女性・2006年)。
- 29) GHQによるCIE図書館の比較については、漢那憲治「米軍の占領下沖縄における図書館についての研究の余滴」『沖縄県図書館協会誌』2004年第8号, p67-68.
- 30) 前掲「琉米文化会館の児童文化活動・児童書」p60.
- 31) 山田勉「近代沖縄図書館小史—明治・大正・昭和前期—」『沖縄県図書館協会誌』1972年第3号, p26.
- 32) 前掲「思い出の八重山琉米文化会館」p. 54.
- 33) 前掲「記憶の底から—八重山琉米文化会館で演劇公演—」p. 56-57.
- 34) 与儀玄一氏へのインタビュー、2005年による。
- 35) 石垣市立図書館は公立図書館設計を多く手がけている、和(やまと)設計の代表的建築物のひとつである。[引用2008-12-30] <URL:<http://www.a-yamato.co.jp>>. 図書館の外観および内部については、同設計事務所のホームページに掲載されている。[引用2008-12-30] <URL: <http://www.a-yamato.co.jp/isigaki01.html>>.
- 36) 『石垣市立図書館 館報』No. 11, 2004. 2, p. 4.
- 37) 「写真スナップ」『創立90年沖縄県立八重山分館のあゆみ—八重山初の図書館として—』沖縄県立図書館八重山分館, 2005, p. 7-18.
- 38) 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社, 1983, 702p.
- 39) 山田勉, 仲西盛秀, 宮城剛助, 本郷清次郎, 漢那憲治「沖縄(琉球)図書館史Ⅰ—図書館先史時代から近代まで—」『沖縄キリスト教大学紀要』1991, 第20号, p. 89.
- 40) 新城安善「大正期の『八重山通俗図書館』点描(抄録)」『創立90年沖縄県立八重山分館のあゆみ—八重山初の図書館として—』沖縄県立図書館八重山分館, 2005, p. 37.
- 41) 三木健「ともしび続けた『貧者の一灯』—沖縄県立図書館八重山分館90年をめぐり—」『創立90年沖縄県立八重山分館のあゆみ—八重山初の図書館として—』沖縄県立図書館八重山分館, 2005, p. 23.

- 42) 前掲「ともしび続けた『貧者の一灯』—沖縄県立図書館八重山分館90年を寿ぐ—」p. 23-24. なお、石垣市立図書館協議会委員には、沖縄県立図書館八重山分館の関係者が加わっており、連携自体は行われていることがわかる。前掲『石垣市立図書館 館報』p. 9.
- 43) 石垣市議会「沖縄県立図書館八重山分館の廃止撤回を求める要請決議」[引用2008-12-30] <URL: http://www.city.ishigaki.okinawa.jp/500000/500100/0807_013.pdf>.
- 44) 「県説明, 『来年廃止変わらず』県立図書館八重山分館」『琉球新報』2008. 8. 7 [引用2008-12-30] <URL: <http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-136928-storytopic-1.html>>.
- 45) 「県立図書館八重山分館 廃止先延ばし」『琉球新報』2008. 10. 7 [引用2008-12-30] <URL: <http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-136928-storytopic-1.html>>.
- 46) 小林文人「戦後沖縄社会教育のあゆみ」小林文人・平良研一編著『民衆と社会教育—戦後沖縄社会教育史研究—』エイデル研究所, 1988, p14-17.
- 47) 沖縄文化部「社会教育指導要項」『琉球史料 第10集文化編2』那覇出版, 1988復刻, p. 4.